

## 大学病院で勤務する看護師の看護研究に対する認識

西浦聡子

奈良県立医科大学附属病院 看護部

## Awareness of nursing research among nurses working in a university hospital

Satoko Nishiura

Nursing department, Nara Medical University Hospital

2020年はナイチンゲールの生誕200年の記念すべき年にあたり、公益社団法人日本看護協会では世界保健機（WHO）と国際看護師協会（ICN）が連携し、「Nursing Now：看護の力で未来を創る」というキャンペーンが展開されている（日本看護協会、2020）。

フローレンス・ナイチンゲール（1820～1910）は、クリミア戦争（1853年から1856年の間、クリミア半島などを舞台として行われた戦争）において看護職としての存在を世に知らしめた人であり、「ランプを持った貴婦人」として知られている。しかし、ナイチンゲールが書き残した著作を紐解くと、1.著述家 2.看護の発見者 3.教育者 4.優れた管理者 5.衛生改革者 6.病院建築家 7.統計学者 8.ソーシャルワーカーの8つの素顔があることがわかる。

科学者、統計学者として、1857年に統計学者 William Farr の協力を得て陸軍の死亡率と民間人の死亡率を比較し報告している。戦争で負傷した人々が、負傷したことが原因ではなく、当時の病院管理が充分でないことから二次感染を誘発させ死亡率を上昇させているという問題点を発見した。

そのことから、研究で得たエビデンスは、制度や政策に反映されたり、患者への直接ケア環境を整えたりすることができると言える。

研究を支援する看護管理者の立場として何をしなければいけないか、看護研究を楽しむ、また重要であると理解してもらえるように関わることを目標に看護部臨床研究委員会の活動を行ってきた。

患者にとって今以上に良いケアを実践できるように看護の質、看護の価値向上のためには看護研究はとても重要な位置を占める。看護師として国家資格を持ち毎日の看護ケアの中で健康問題に看護過程を展開し実践の科学者としての思考過程を身につけている集団であることから、「看護師は研究者の集団」とであると自負している。

奈良県立医科大学附属病院看護部では「看護部臨床研究委員会」が研究支援、看護研究発表会の開催を行っている。

2018年度からは、看護研究支援プロジェクトを行い、自主的な参加を促し看護研究への取り組みを支援している。このプロジェクトに参加したメンバーが研究課題を持ち大学院へ進学した、病棟の看護研究へとつなげた、などの成果を実感している。

2019年度からは、臨床研究センター（iCats）でのより専門的なアドバイスや支援の効果を期待して、委員会と研究センター双方での支援体制となった。

今回、看護研究を支援してきた委員会として今後の「看護部臨床研究委員会の在り方」について検討するために、当院で勤務する看護師が研究に対してどのような思いを抱いているのか、どのような支援を必要

としているのかを目的として、「大学病院で勤務する看護師の看護研究に対する意識調査」を行った。

この調査内容は、2019年看護部院内看護研究発表会で報告した（奈良県立医科大学附属病院2019年度看護研究発表会抄録集に掲載）。本論文は、看護部臨床研究委員会の許可並びに看護部長の許可を得てこれを加筆、改変したものである。

当院の看護師993名（2019年12月現在、看護師長、委員会メンバーを除く）の中から459名の回答を得たうち公表に同意を得られた442名を分析した。

属性は、男性11.3%、女性88.7%であった（図1）。

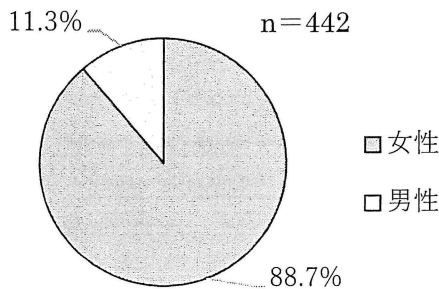


図1. 対象の属性 男女比

経験年数別にみると、1~3年目が21.7%、10年目以上は50.9%であった。7~9年の回答は、9.5%であった（図2）。

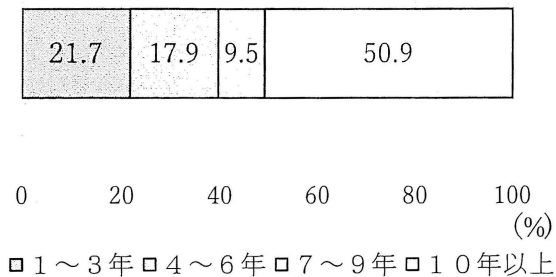


図2. 経験年数

その回答のなかで、「看護研究は必要だと思いますか」という質問に対する回答で、「必要である」、1~3年目の経験年数の浅い看護師は46%、10年目以上の看護師は70%であった（図3）。

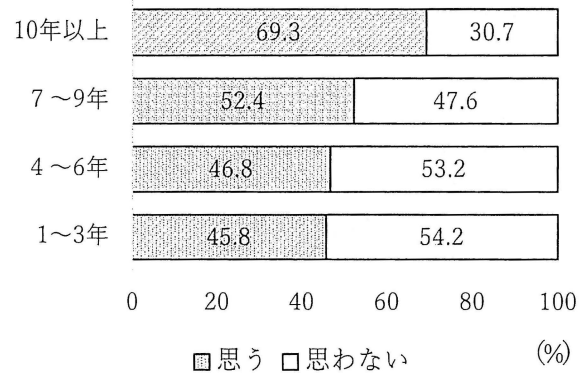


図3. 看護研究は必要と思いますか

必要である必要でない双方の具体的な理由として、自分、患者、病棟、看護学にプラスになるという肯定的な意見と、臨床に役に立っているという実感がない、時間が無い、自分には関係が無いなどの否定的な意見があった。

「研究の成果を臨床に活用できていると思いますか」という質問に「実感できている」の回答は1~3年目以上は23%、10年目以上は40%の結果であった（図4）。

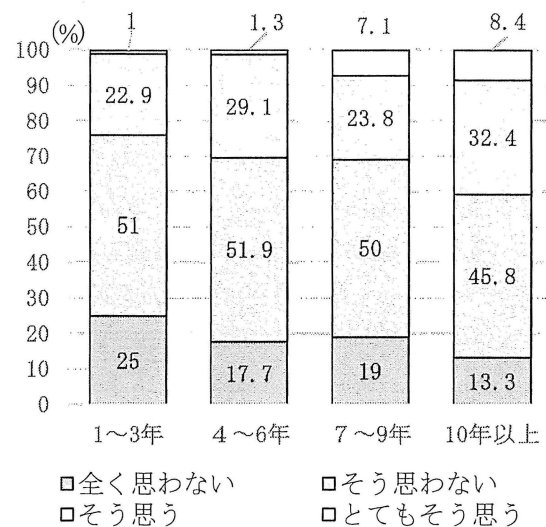


図4. 研究の成果を臨床に活用できていると思いますか

経験年数が長い看護師の方が、研究で得た結果を学会などの外部に公表し評価を得た、業務改善が研究につながることも経験しており「活用できる」ことを実感していると考えます。研究に対するモチベーションに関しては、全体的にモチベーションは高くない(図5)。

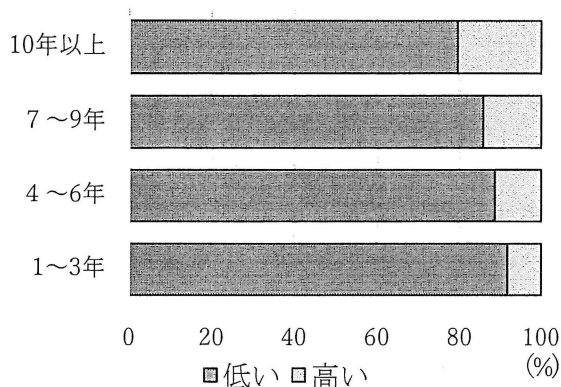


図5 研究に対するモチベーション

研究をためらう理由(表1)には、「時間の拘束があり自分の時間でしなければならない」「知識がない」「研究課題がみえない」があった。

知識がない	208
研究課題が見えてこない	189
研究期間が長いと負担に感じる	173
組織的支援がない	124
研究に費やす時間がない	101
すでにメンバーが構成されている	16

研究方法が難しい
業務による多忙
残業になるため
院内研究の手順があいまい
パソコンが苦手
興味はあるが苦手意識がある
ためらいはない
一人で研究するには負担が大きい

研究指導において困る点に関しては、「自分の時間で指導しなければいけない」「自分に研究の経験がない」が挙げられている。

看護部臨床研究委員会の認知度は、知っている71%(図6)でありその中で、支援を受けた割合は、25.5%となっている(図7)。

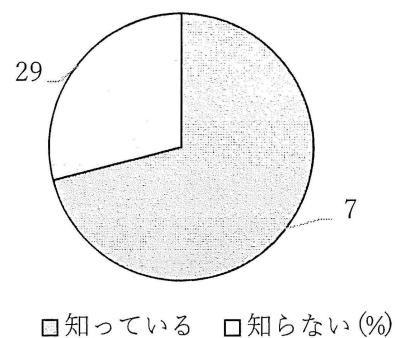


図6 看護部臨床研究委員会の認知

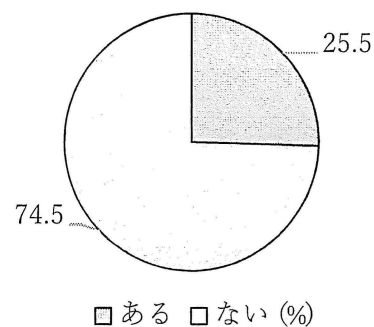


図7 支援を受けたことがありますか

臨床現場の看護師において「研究をしたい」「研究が楽しい」と感じるためには日常の看護場面やケアにおいて疑問に感じたこと、知りたいと思ったことなどの素朴な疑問をテーマとすることがとても大切であると思っている。「そんな簡単な疑問?」「業務改善ではないのか」などと驚くことも多いかもしれない。

しかし、臨床の場においては毎日の関わりの中における疑問にインスピレーションを感じることに取り組むことが研究に苦痛

なく取り組み、やらなければならない研究を乗り越えることができる一歩であると思う。

以前は褥瘡ケアにおいて予防が看護師の仕事で、発生させてからのケアは看護ではないといった意見もあった。しかし、臨床の地道な実践やデータを積み重ねていくことで、その成果が診療報酬や制度にも結び付いてきた。

臨床における看護研究の目的は、「今以上に質の高いよりよいケアを探索し、その結果を患者に返してより良い看護実践をする」ことである。日常的に疑問に感じている思い、問題に対して、「なにをしたいのか」をしっかりとプロセスを踏んで「何を明らかにしたのか」「何を解決するのか」を明確にできるように支援が必要であると感じている。

しかし、アンケート結果からもわかるように「時間の制約」は臨床の看護師にとって無理をさせられないというのも現実であ

る。私たち臨床で関わる看護師が行う研究の多くは「患者に関する研究」が多い。

日常の看護ケアや日常の素朴な疑問の問いからエンドポイントをちゃんと決めたデータ取得、焦点を絞ったテーマを持った研究に導いていく必要がある。

研究することが主な目的にならないようにしたい。

#### 文献

日本看護協会：Nursing Now

[https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/nursing\\_now/nncj/index.html?utm\\_source=top&utm\\_medium=banner&utm\\_campaign=main\\_visual](https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/nursing_now/nncj/index.html?utm_source=top&utm_medium=banner&utm_campaign=main_visual)  
(Accessed2020-03-02)

金井一薫 (2014) : ナイチンゲール「看護覚え書」. 第1版. 西東社.

中島美津子 (2019) : 管理職のための組織管理. 第1版. 日総研出版.